
Ich w?hle es

其場凌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I c h w ? h l e e s

【Nコード】

N 7 5 5 4 V

【作者名】

其場凌

【あらすじ】

人と鬼が争う世界で、恋に落ちた。
(世界観…黒田きのと様)

プロローグ

暗く湿った石壁の通路に男の重たい足音が白々しく響く。右手に規則正しく並ぶ鉄格子。その向こう側の世界は一樣に生気がない。そのくせ充満した匂いは生々しい。残り僅かな時間をただ屍のように生きるだけの罪人たち。

しかし、男の足が止まった狭い牢獄の中だけは、様相が違った。男の携えた松明の明かりが、鉄格子の向こう側を照らす。床に一人の人間が転がっていた。空気が漏れるような音が規則的に聞こえている。瀕死の罪人がしぶとく息を吸い、吐き出す音だった。生きているのか。確認して、男は声をかけた。

「馬鹿な事を」

抑揚の少ない話し方は男本来のものだ。そこから感情の機微は読みとれない。男の左頬、耳から鼻頭まで真横に刻まれた傷跡が筋肉の動きに合わせて動いただけで。

床に伸びた身体は声に反応して僅かに動いたが、吐き出す息が呻き声に変わったただけだった。

「何故だ」

男はかまわず尋ねる。極めて事務的に。答えはない。しかし次いで「鬼の為か」

『鬼』。その忌まわしい単語だけ吐き出すように。

死に損ないの息継ぎが荒くなる。何かを伝えようと、乾いた唇が苦しげに喘いだ。

「……あ、いし、て……た……か、ら」

あいしてたから。

愛していたから。

男の顔に微かな動揺が走る。表情を変えたと頬の傷跡が疼いた。

「馬鹿な事を」

抑揚はない。しかし、男は感情を殺すためにきつく瞼を閉じなけ

ればならなかった。鉄格子の向こうに光る目が、真っ直ぐに男を見ていたから。

幾度も打ち据えられ、赤黒い血に濡れた両眼は、それでもなお迷いのない眼差しをしていた。

「頼み、が……」

そして罪人は、今際の際に願いを口にする。

(1)

人が、恋に落ちる瞬間を見てしまった。

その時、ミスギのくつきりとした形の良い両目が見開かれたことに気づいたのは、幸いにも隣にいた幼なじみだけだった。

夕刻のことだ。カサネは買い出しから帰る途中で、配達中のミスギと偶然会った。ちょうど良かった、手間が省けたと喜ぶミスギは鞆から一通の手紙を取り出してカサネに手渡す。白い封筒だ。

「最近多いな」

ミスギは郵便配達の仕事をしている。ああ、と気のない返事をするカサネに、

「女？」

とミスギが形の良い目を細めて揶揄う。

「まあな」

「嘘つけ」

「なんで嘘だと分かる？」

「分かるさ。何年の付き合いになると思ってたんだ？」

ミスギに言われて、カサネは数えるフリを試みる。本当は数えるまでもない。自分の年齢がそのまま、ミスギと過ごした年数なのだから。つまり、二十四年間だ。

「ま、誰でも良いけど差出人に名前くらい書くように言っておけよ。万が一返送しないといけなくなった時に困る」

友人の注意に生返事をして、カサネは手紙を自分の鞆へとねじ込んだ。

風が吹いたのはその時だ。

そして鈍い音がした。音の発生源が頭上だと気づいた二人は空を見上げる。

「あれ……まさか、鬼……？」

「鬼だ」

頭上に広がる茜色の空は、いつの間にか戦場に変わっていた。否、狩場と言ったほうが正しい。一匹の鬼の四方八方を狩人イエーガーが取り囲み、少しずつ距離を詰めていく様はまさに獲物を捕らえる最終段階。

狩人イエーガーの槍が鬼を追いつめる。しかし鬼も大人しく捕まる気はないようで、唯一逃げ道の空いていた足下へと、つまり、ミスギたちのいる地上へと狙いを定め風を切る。狩人イエーガーたちがそれを見逃すはずはなかった。逃げる鬼の背中に投げつけた槍は、寸でのところで避けられてしまう。それでも、鬼の体勢を崩すには十分だ。

重力を操り空を飛ぶ力に何らかの影響があったのかもしれない。鬼が――鬼の纏う、まるで重量を感じさせない純白の絹が――二人の目の前に落ちてきた。質の良さそうな衣がミスギの鼻先を優雅にかすめる。雨の匂いがした。

次いで、ミスギはこの世のものとは思えぬ生き物をまともに見てしまう。瞬いた両眼は長く濃い睫に縁取られ、僅かに濡れていた。白い肌は痛々しいほど夕陽色に染まり、まるで血を浴びたようだ。生気のない唇が動いた。その細い喉から絞り出された小さな声はミスギの耳だけに届く。鬼の手がミスギの腕を掴む。皮膚に爪が食い込んでいたが、ミスギは動けなかった。

「ミスギ！」

代わりにカサネが叫び、狩人イエーガーの手がミスギから鬼を引き剥がす。捕獲用の縄にかかった鬼が、悲鳴を上げた。空気を裂くような高い声で。

「おい、ミスギ！ 大丈夫か！？ しっかりしろっ」

体をゆすぶられてようやく、ミスギは正気を取り戻す。焦点の定まらないミスギの視界の端に、大柄な狩人イエーガーの男が見えた。チームの長だろう。一際立派な鎧を見に付け、屈強そうに見える。

男は厳しい顔つきで二人に近づいてきた。頬を真横に切り裂く鋭利な傷跡がまた、男の威圧感を増していた。

「怪我はないか」

気遣う言葉は感情を伴わない。

答えられないでいるミスギの代わりにカサネが頷くと、狩人イエーガーはすぐに仲間の待つところへときびすを返した。

「今、の……」

ミスギの目は狩人を見ていない。今や意識を奪われ、弛緩した体を狩人イエーガーに抱えられている鬼を凝視したまま動かない。

「驚いたな。……どうした？ 魂でも食われたか？」

狩人イエーガーたちはもう、捕らえた鬼を連れて空へと駆けあがっている。

ミスギの視線はそちらを追っていた。空へと消えていく、鬼を。

「……たまげた」

ミスギの視線の先と、どこか現実味を帯びない声と、目の色を見て、カサネは頭を抱えたくなった。

「おいおいおい勘弁しろよ」

「何が？」

「ずっとぼけんな。お前の今の顔、姉貴に一目惚れしたと時と一緒にだ」

「――まさか」

自覚のない幼なじみは、しかし思い当たるふしはあったようで顔を隠すようにして掌で口元を覆う。

「確かに、恐ろしく綺麗だったけどな」

カサイは認める。鬼の、得体の知れない不気味さは時に妖艶に変わる。人ではないからこそ魅力的で、どうしようもなく惹かれていく。危険すぎる。

あれは鬼だ。

カサネの目の前には、未だ惚けたままの幼なじみの顔がある。

「あの子、どうなるのかな」

「殺すに決まってるだろ。あと、あの子とか言うな。あれは鬼だ。役人にでも聞かれたら良いことになんねえぞ」

「わかってる。どうすることもできない」

わかっていない顔だとカサネは思ったが、言わなかった。ミスギの真っ直ぐなまなざしを見たら、言っても無駄だと思った。

「お前が狩人^{イエーガー}になれてりやどうかできたかもしれないけどな」
容赦のないカサネの言葉に、ミスギは痛そうに顔をしかめる。
ミスギは無重力を使えない。彼の家は代々多くの狩人^{イエーガー}を供出して
いるが、空を飛べないミスギはいわば落ちこぼれだった。

「いいんだ、もう。……配達しないと」

「頑張れよ」

カサネと別れた後、ミスギはもう一度空を見上げた。鬼の姿はもう、見つけることができなかった。

カサネは酒屋を営んでいる。子供のころに両親を亡くして以来、姉と一緒に切り盛りしてきた。ミスギの告白を断った姉は五年前に薬屋の息子に嫁いだので、カサネは今、一人だ。

ミスギから受け取った手紙を開いたのは、夜になってからだだった。なじみの客からの注文書だった。

ただし、酒ではないほうの。

手元に燭台を引き寄せ、条件を確認する。

不意にその灯りが揺らめき、風の訪れを知らせる。顔を上げると、開いた戸口を塞ぐように大きな男の影があった。

「閉店だぞ」

「そんな儲からない商売は辞めたらどうだ」

カサネの抗議の声は関係ないとばかりに、男は店の中に踏み込む。
燭台の明かりに、狩人^{イエーガー}の鎧が鈍く光った。

「今日はどうした？ 狩人^{イエーガー}さんたちでお疲れ会やるために酒を注文しに来た訳じゃないんだろう？」

この狩人^{イエーガー}が店に来る時、用件はいつも決まっている。近づいた男の背に、あさぶくろが見えた。

「一匹引き取ってくれ」

狩人イエーガーはカサネの足下にあさぶくろを投げて寄越す。あさぶくろの中から呻く声が聞こえ、幾度か袋が跳ねたが、すぐに静かになった。「生きてるのか」

問いかけたカサネは、先ほどの手紙の中にあった注文書の条件を思い出す。一つは、生きていること。ちようどいい。

「取れたてで活きがいい。見目も悪くない」

狩人イエーガーは付け加えながら、かがみ込んで浅袋の口を開けた。まさか、とカサネは覚悟する。

袋口から覗いた鬼の顔は、覚悟をしていても、直視するには勇氣が必要だった。

半ば諦めながら確認した鬼の顔にはやはり見覚えがあった。つい夕刻、ミスギが一目惚れした鬼は、濡れた目でカサネをいぬく。猿ぐつわで口を封じられてもなお、美しいことに変わりはなかった。

カサネは鬼の売人シユラウだ。酒屋を隠れ蓑に、文字通り鬼を売る。

買い手はさまざまだ。見せ物目的もあれば、完全に変態の域を越えている者もいる。死体でも相当の値が付くのだ。生きていればなおさらのこと。

カサネ自身は鬼には興味がなない。こんな恐ろしい生き物を買う客の気が知れないと思ひながら、商売にしているのだから文句を言う筋合いもない。

鬼はアルコールやタバコと同じ趣向品、というのが商売人らしいカサネの考えだった。

鬼を捕まえても処分の手間がかかるばかりの狩人イエーガーにとっても、カサネのような売人シユラウの存在は必要なのだ。決して公にはできないが、上の方の人間は知っていて黙認しているのが実情らしい。

今夜鬼を運んできた狩人イエーガー、カラタチは鬼の代金のほかに酒も所望

した。

「珍しい。酒は傷に障るんじゃないかったか？」

「もう完治した。グラスを――」

カラタチの頬に残る傷は、先の戦いで鬼の爪につけられたものらしい。

「ここで飲むのか」

「つき合え」

一介の酒屋であるカサネと、狩人イエーガーの中でも上に立つカラタチは、本来ならば決して旨酒を酌み交わせる間柄ではない。突然の申し出に、カサネは嫌な予感を覚えたが断ることなどできるはずもなかった。いくら取引相手とはいえ、狩人イエーガーと対等な関係が築けるはずがない。

何かがある。緊張を保ったまま飲む酒は不味い。

カサネがなかなか減らない時分のグラスの中身を見つめる一方で、カラタチはというと、その見た目を裏切らない飲みっぷりで杯を干していく。

「お前の売った鬼が逃げたらしいな」

最初に覚えた嫌な予感は、カサネがようやく一杯目を空にしたところで現実となった。

覚えのある話に、唇を横に引き結ぶ。

「餓鬼でも鬼は鬼だ。油断して、ちゃんと縛っておかないからそういうことになる」

責任をこちらに押しつけられてはたまらないとばかりに、カサネは無然と言い切った。

が、カラタチの言わんとすることは別にあったらしい。

「知っているか。最近鬼を助けようなんて酔狂なことをやってる連中がいるらしい」

カラタチの、狩人イエーガーの目がカサネを捉える。ここで視線を逸らしたら終わりだとカサネは本能的に悟った。

揺さぶりをかけて、僅かでも怪しい素振りを見せればきつと、狩人イエーガー

人は容赦なく捕まえにくるに違いない。

「何が言いたい」

「餓鬼をつないでいた縄は切られていた。……お前が関わっていないならばいい」

「はっ！ 鬼を売って儲けてる俺が鬼助けか。——笑わせるな」

カサネの声は低く、カラタチを見返す目には侮蔑の色が混じっていた。そうだな、と頷いた狩人^{イエーガー}が果たして本当に納得したのかどうかはわからない。

ミスギが生まれる何百年も前から、人は鬼を狩っていた。「鬼に近づいてはいけないよ」と子供の時分から教えられてきたカサネと違い、ミスギの家では「鬼を殺して功績を上げろ」が常だった。ミスギ自身は無重力を使えなかったので、言われていたのはいつも年の離れた兄^{イエーガー}だった。

両親の期待どおり狩人^{イエーガー}となった兄は、二年前に死んだ。鬼との戦いの中で鬼にやられたのだと教えられた。

配達員となったミスギは、命をとられることなく平和な日々を過ごしている。危険らしきものがあつたとすれば、先日の鬼との遭遇劇くらいだ。しかしあれは危険というよりも……。

頭の中によみがえる鬼の姿を消し去ろうとでもするようにミスギは頭を大きく振るうと、配達^{イエーガー}の続きを再開する。

配る手紙の中に、カサネ宛の白い封筒を見つけた。また、差出人の名前がない。

鬼に惚れたのだと指摘した悲しい幼なじみの顔を思い出す。

カサネの両親は、鬼に殺された。

元々この辺りは鬼があまり出ない地域で、どこかのんびりした気風^{イエーガー}と活気のある商人が上手く同居する町だった。

狩人とも関わりなく、ただの酒屋でしかなかったカサネの両親がなぜ殺されなければならなかったのか。

平和な町はざわめき立ち、人々は外出を控えるようになった。不安に駆られた町は、中央に特別支援を申し出る。金を出すから自分たちを守ってくれと。

(2)

ある晩、眠りについてすぐ、店の扉を叩く音にカサネは起こされた。何事かと身を起こし、枕元の燭台の蠟燭に火を灯す。

「……カサネ、カサネ……！」

扉越しに響めた声で名前を呼ばれ、カサネは迷わず扉を開けた。ミスギの声だとすぐにわかったから。

「どうした？　こんな時間に……ミ、スギ!?」

すでに日は越えている。扉が開くなり体を割り込ませるようにして中へと入ってきたミスギはそのまま、前のめりに床へと倒れ込んでしまう。

「ミスギ！　おい、大丈夫か？」

体に触れて抱え起こそうとすると、ミスギは小さく呻いた。手に触れたなま暖かい感触。蠟燭の明かりに照らされた床には黒い染みが見てとれた。

「怪我、してるのか……なんで、」

カサネの問いには外から聞こえてくる怒号が答える。

「探せ！　まだその辺に隠れてるはずだ、炙り出せ！」

複数人の、統率のとれた重たい足音と命令する声はすぐに軍人^{ケンブ}のものだと知れる。

足音は徐々に近づいてくる。カサネはまず灯りを吹き消した。しかし中に入って探されたら、すぐに見つかってしまう。

家の中でミスギを隠し通せる場所があるとすれば、一カ所だけ。

カサネは迷った。ほんの一瞬、幼なじみを天秤にかけた。

「動けるか？　少し、我慢しろよ」

引きずるようにしてミスギを運んだ先は、重たい酒樽の下に設えた扉の奥――地下室だ。

明かりはない。暗闇の奥で紫の光が二つ灯ったような気がしたが、カサネは気づかないフリをした。ミスギにはここで我慢してもらわ

なければいけない。

扉を締め、酒樽を戻して寢所へと戻る。途中で、店の扉を乱暴に叩く音がした。

数秒、間を置いてから戸口へと向かう。

「誰だ」

「開けろ。この辺りに賊が紛れ込んだ」

驚いたことに、聞こえてきた声はカラダチのものだった。

カサネは、自分の運の良さと判断の成功にいつそ拍手を送りたくなる。カラタチは当然、カサネが鬼をどこに隠しているか知っていた。

カサネは従順な一般市民の体をして、言われた通りに扉を開ける。床に残る小さな染みを靴の裏で隠しながら。

「物騒なことですね。こっちには来なかったようですが」

「念のため、中を調べさせてもらう」

カラタチと数人の部下たちは軍人らしいやり方で踏み込んできた。^{ケンブ}問答無用で寢室を暴き、小さな天袋まで覗いて。部下の一人が酒樽を動かそうとしたその時だ。

「ここはもういい。次に行くぞ」

タイミングよくカラダチが命を下す。

^{イエーガー}狩人が立ち去り、静寂が戻ってきてしばらくしてからカサネは地下室への扉を開けた。そこにはやはり、燃えるような目をしたミスギが何かを言いたげな顔をして待っていた。

だからカサネは先手を打つ。

「何しでかしたんだ」

「……迷惑かけるつもりはなかったんだ」

案の定、ミスギは申し訳なさそうに肩を落とす。問いへの答えになっていないことを知りながら。

「そうじゃねえだろ。ただ事じゃねえんだぞ！ 軍人に、^{ケンブ}それも狩人^{イエー}に追われるなんて……どういことなんだよ説明しろ！」

思わず伸びたカサネの手は、ミスギの肩を掴む。怪我人であるこ

とは忘れていた。ミスギは苦痛に顔を歪めたが、カサネの行為をとがめない。彼が、自分を心配しているのだということは十分にわかっていたから。

「鬼を助けてるんじゃないか……って、ほとんど強制的に連行されそうになった」

「馬鹿な！　なんでお前がそんな事……」

一蹴したはずの事実が、ミスギの真摯な眼差しに跳ね返されて真実へと変わってしまう。

「まさか……助けた、のか？」
鬼を。

声にならない問いを投げる。頼むから肯定だけはしてくれなとかサネは祈りながら、しかしいつも実直な幼なじみが嘘などつかないことは十分にわかっていた。

「嘘だろ。どういう事だよ！」

「お前こそ、どういう事だ！　これは！？　何故、」

再びミスギの目に炎が燃え盛る。地下室の隅、暗闇に光る紫を指差して、ミスギが問う。

「何故、彼女がここにいるんだ」

「そんな風と呼ぶな。あれはただの鬼だ。俺の、商品だ」

反射的にミスギの腕が動いた。怪我をしていない方の右手が、カサネの頬に痛みを与える。

殴られた勢いでカサネの体は後ろへ仰け反ったが、ミスギの肩を掴む手は離れなかった。

口の中に広がる鉄の味に、カサネの咽の奥からどす黒い何かが湧き出てくる。静かに戻したカサネの表情は、完全にいつもの冷静さを欠いて、

「あいつらは鬼だ！」

激情に任せるまま叫ぶ。

「違う、カサネ。お前の思ってるのは、違う」

「何が違う！　あいつらは殺したんだ」

カサネの奥深くでヘドロのように堆積した憎しみが溢れ出す。

「聞けよ、カサネ！」

「はっ！ 俺の両親を殺した奴らを利用して、生きて、何が悪い！ 復讐だと喚いて殺すよりよっぽど建設的だろう！？」

一矢報いる事ができるとすれば、これしかないとかサネは信じている。

ミスギは答えなかった。責めるわけでも窘めるわけでもなくただ、哀れなものを見るような目で、

「カサネの両親を……殺したのは、鬼じゃない」

ミスギの震える声が、嘘をつかない真っ直ぐな目が、真実を告げる。

それでもカサネは「嘘だ」と呟いた。

「本当だ。俺の兄者も、鬼に殺されたんじゃない。兄者は気づいてしまったから……鬼と戦うことの無意味さに。この国のカラクリを知ってしまったから、消されたんだ。……狩人^{イエーガー}に。同じ、人に。――兄者は殺される前に調べていた。カサネの両親の死は、俺たち市民に鬼が怖いものだって意識を植え付けるために利用されたものだった。殺したのは鬼じゃない。だから、カサネは鬼を憎まなくていいんだ」

カサネの目はもう、ミスギを見ていなかった。その肩越し、暗い壁に寄りかかり怯えた表情を見せる鬼の少女へ。

「俺は……俺は……一体、誰を憎めばいいんだ……」

ミスギは首を横に振る。カサネには誰も憎んでほしくない。それがミスギの答えだったが、それを口に出すのはあまりにも酷で、薄情だ。

もっと早くに気づいて止められたならば、という後悔と、今もまだどうすることもできない憤りを胸に、ミスギはただ黙って、慟哭するカサネを抱きしめた。

(3)

「逃げよう」とミスギは言った。軍人^{ケンブ}に追われる立場になってしまった以上、ミスギはもう家に帰ることは叶わない。

カサネは「待ってくれ」と頼んだ。

答えの出ないまま夜が明けた。

地下室へと二人分の朝食を運んだ時に「今日は店を開けない。少し、出てくるから」と一方的に告げたカサネは、今、死んだような目で町を歩いている。

どこにいいかわからない。それなのに足は勝手に、ミスギの家へと向かっていた。

辿りつけるかどうかともわからないのに。案の定、ミスギの周りには人垣^{ケンブ}ができていた。

大きな門が開き、軍人^{ケンブ}たちが物々しい様子で出てくる。ミスギの両親の姿は確認できない。

軍人^{ケンブ}の先頭に、頬に傷を持つ男がいた。一際大きな体躯と重たげな鎧を纏って、真っ直ぐにカサネの方へと歩いてくる。

カサネはおもむろに懷からペンを取り出し、狩人^{イェーガー}の前へ進み出ると、膝について恭しくそれを差し出した。

「昨夜、私の家を調べに入られた際、落とされませんでしたか？」

カラタチは足を止め、カサネを一瞥。後ろの部下に「先に行け」と言ってから、確かめるフリをしてペンを手に取った。

「……今夜もう一度、お前の店を調べる。俺は同行できない。……このペンは俺のではないようだ」

カサネの欲しかった情報を与えてくれたカラタチは、ペンを返し、早足に立ち去っていく。

最も懸念していた事だった。ミスギが一番親しくしていた友人は、カサネだ。幼なじみが鬼助けに関わっていたのならば、カサネとて疑われているに違いない。

今、狩人が踏み込んで来たとして、地下室にミスギと鬼の両方を見つけた時、彼らはどんな風に思うのだろうか。

カサネも鬼助けのグルだと思いうに違いない。助けた鬼を匿っているのだと。

ミスギと鬼さえ見つからなければ、カサネは言い逃れができる。鬼に両親を殺された子供が、鬼助けなどするはずがないのだから。自身の傷を利用するのは良い気分ではないが、やむを得ない。

取るべき道は決まっている。しかし、店に戻るカサネの足取りは酷く重たかった。

地下室の中の一人と一匹は、静かに夜明けを待ち、厳かに食事を済ませた。鬼の口を塞ぐ猿ぐつわは食事の前にカサネが外した。両手を縛っていた縄も、同時に。

鬼は攻撃する様子もなく、ただ黙々と、ミスギと同じ食事をとり、同じ茶を啜っている。

「君……名前は？ 俺はミスギ」

碗を置いたタイミングで、ミスギが口を開いた。

鬼の少女は躊躇いがちに薄い唇を動かし、「ニ、ジ」と伝える。

「ニジ……。聞いてほしい。カサネは、さっきの男は俺の友人で、君に酷い事をしたけど、本当は悪い奴じゃないんだ。子供の頃に凄く悲しい思いをして、それで……」

カサネのしていた事を、まだ、ミスギ自身信じられない。それなのに彼女に許してほしいなどと。虫のいい話だと気づいて、続く言葉を見失う。

「お話は昨夜聞こえておりましたので、事情はわかっているつもりです」

想像よりもずっと聡明そうな声が少女の口から発せられて、ミスギは驚いた顔をした。少女は頬に落ちる髪を子供らしくない仕草で

耳にかけ、少しばかり険しい表情を見せる。

「ですが、私への仕打ちはともかく、同胞へのこれまでの扱いを、私は決して許すことはできないのです。あの方の生き方に多少の同情の余地はあっても……。私が、鬼であるがゆえに。……理解していただけますか？」

凜とした目で訴える少女の言葉には迷いが無い。彼女は自身の置かれた立場をよくわかっている。これから先、どうなるかわからないこの状況下でさえ、鬼に両親を殺されたと思っていたカサネの心情に理解を示し、そして、カサネに対して迷いのあるミスギの心をも見抜いている。完敗だった。

「君の言うとおりだ。……鬼は、人を憎んでる？」

ミスギの問いに、鬼は浅く頷く。

「そういう同胞は、たくさんいます。あの方と同じように、近い者を人に殺されたらそうなります」

「ニジは？」

次いで個人的な感情を問われた少女は、少し考え、言葉を選ぶ。

「恐怖の対象ですが、憎しみとはまた違います。あなたのような、不思議な人もいる……」

少女が僅かに微笑んだので、ミスギはその顔から目を離せなくなってしまう。異人の目の色に、囚われてしまう。

ミスギは何事も熱中しやすい性格だと自覚がある。恋愛でもそうだ。惚れやすく、一度惚れるとほかの何も目に入らなくなる。

(カサネの言ったとおりだった)

鬼に惚れた顔だとカサネに指摘された直後は自覚などなかったが、今ならばはっきりとわかる。

鬼の少女は美しく聡明で、そして強かだ。

視線を外す、ただそれだけの動きに随分と苦勞した。

「俺だけじゃない。何人かで、捕らえられた君の仲間を逃がす活動をしてるんだ」

ミスギの活動は当然、軍人^{ケンフ}に見つかれば極刑に値する。元々、鬼

を助けることに献身的な理由があったわけではない。無益な戦いを止めるため、兄を切り捨てた狩人^{イーガー}たちに復讐を果たすため、ゲヒシテを求める暴君の目論見を阻むため。

彼らがこれほどに人に近いとは、思ってもみなかったのだ。ミスギだけではない。恐らく、この国の誰も気づいていない。気づいていながら隠匿し、あらゆる富や欲のために鬼を利用している一部の権力者を除いては。

ミスギ自身、鬼とともに話すのはこれが初めてだ。

「先日、捕らえられた鬼の子が人に助けられたと話しておりました。あの子も、あなた方が……？」

ミスギが力強く頷くと、少女の目が驚きに見開かれる。明かりの少ない部屋の中でも静かな輝きを放つ彼女の目は水晶のようだと思っ

た。彼女の問いを皮切りに、ミスギとニジは多くのことを話した。互いの知る、人と鬼に関する認識と感情、歴史としがらみ。誤解や偏見も多く、真実を知るたびに二人は沈黙した。

もっと早くに知っていれば——しかし知ったところでどうにもできないほど、赤い血に濡れた悲しみは根深く、二つの種族を分かつ壁が高いことを思い知る。空と、地ほどに。

(4)

話し疲れていつしか眠ってしまった二人を起こしたのは、地下室の天井に響く、重たい酒樽を動かす音だった。

カサネが顔を覗かせ、静かに中へと下りてくる。扉の隙間から僅かに見えた店内は夕日色に染まっていた。

「夜にもう一度、軍人^{ケンフ}がここに来る。ミスギは今すぐ出て行ったほうがいい」

カサネはミスギの目を見ず一方的に言い放つ。

「……彼女は」

ミスギは、自分の後ろで膝を抱えて座るニジを見た。ニジは何も言わない。カサネの視線も鬼へと移り、

「予定通りだ。売る」

事務的に告げる。

「カサネ！」

「俺には鬼を助ける義理はない。これまでどおり金を稼ぐ。俺はただ家畜を売って生きていくだけだ」

一切の感情を排除して、カサネは突きつける。どうして、とミスギの唇からこぼれ落ちた言葉が拾われることはない。

「お前の両親、殺したのは、鬼じゃないって――」

ミスギはもう一度、苦い真実を口にして、カサネの肩を掴み揺さぶった。

「わかってる」

カサネはその真実を疑っているわけではない。ミスギが嘘をつかないことを知っている。

「お前のことは助けるよ。友人だから。でも、鬼は違う。結局は敵だ。俺は敵を助けて狩人^{イェーガー}に殺されるなんて御免なんだ」

カサネの中で変わらない本質。鬼と人は違うもの。それは一般市民みなが持つ意識で、カサネだけが責められる類のものではない。

しかし、ミスギは違う。今日一日、ニジと話をして知ってしまった。鬼も人と変わらないことを。

敵とは何だ。

殺されて、殺して、また殺されて、殺して殺して、殺されて殺されて、繰り返し、終わりなく、空と地の間を血で隔て、向き合うことなく、どちらかが滅びるまで。

敵とは誰だ。

「……『助けて』って、言ったんだ。初めて会ったあの時、この子が俺の腕を掴んで、小さな声で、助けてって言ったんだ……。放っておけるのか、お前は。狩人^{イェーガー}に追われてる俺のことは助けてくれたのに、この子のことは助けないのか？」

ミスギは怒りと悲しみのバランスを取りながら、強い口調で迫る。どちらか一方が増えると泣き出してしまいそうだった。

カサネにもわかってほしい。これ以上、鬼を傷つけないでほしい。

「お前と鬼と一緒にできるかよ」

ミスギの願いは、カサネには届かない。吐き捨てるように否定する。

「一緒だよ」

「違う」

「カサネ」

「絶対に違う！ ……どうしてわからないんだ」

肩を掴んだままだったミスギの手を、思い出したように、カサネは乱暴に振り払った。駄々をこねる子供のようだった。

ミスギは困ったような顔で、カサネの頭に手を伸ばす。幼子をやさように撫でる手は拒絶されなかった。

「わかれよ、ミスギ……好きなんだ。俺は、お前が……」
苦しい思いを絞り出す。

カサネの真実。

鬼が憎いのではない。

彼女が鬼だから、助けられないのではない。

ミスギを愛しているから、彼を奪った鬼の少女が憎い。

「一緒だよ、カサネ。俺はこの子のことが好きだから助けたい。お前のことも好きだ。だからこれ以上、自分を傷つけるようなことをするな。頼むから」

カサネの告白を聞いても、ミスギは彼の頭を撫でることを止めなかった。驚くこともなく、受け入れることも否定することもせず、ただ「わかってた」と頷く。

「……気づいて、たのか」

恐る恐る、カサネは顔を上げた。目の前の幼なじみの眼差しはいつも変わらない。真っ直ぐで、純真で、曇らない。

「俺も、カサネが好きだ」

頭を撫でていた手で後頭部を掴み、ミスギは唇をカサネのそれに押し当てる。カサネは数度瞬いた。ミスギの真っ直ぐな目が、静かな情熱を携えた目が、近すぎる距離でカサネを射抜く。乾いた唇が離れ、切なくなったのも束の間、

「……はっ！　なんて奴だ……」

（俺を好きだと言った唇で、）

同じ唇で、ミスギは鬼の少女にも同様の行為をした。少女は大きな目を自然と閉じて悲しげに微笑んだ。

「俺は行く。お前も、彼女も一緒に連れていく」

ミスギの目は本気だ。馬鹿げているとカサネは鼻で笑い、首を横に振った。そんなのは御免だ。三人で仲良くハッピーエンドは有り得ない。

「行けよ。その子連れて、さっさと行け」

にわかに外が騒がしくなる。軍人^{ケンフ}が予定よりも早く来たようだ。

カサネが、狭い地下室の壁に設えてある戸棚の一つを横に押しずらす。くり貫かれた壁の空洞は、人がやっと歩いて通れる程度の大さきの抜け道だ。

「カサネ……」

「早く行け。町の外まで、誰にも見られずに行ける」

「お前も一緒に来るんだよ」

「無理だ」

「嫌だ！」

今度はミスギが、聞き分けのない子供のように叫ぶ。

「どちらもは選べないんだ」

鬼か、人か。

そんな難しい話ではない。もっと単純な。

（俺か、その子か）

「……ごめん。カサネ、ごめん。ごめん、俺はっ」

それは、どちらから交わした口付けだったのか。

先ほどのよりもずっと軽く、触れた箇所もわずかなものでしかなかったけれど、焼けるように熱くて。

さようなら。

暗い道の向こうに鬼とともに消えていく幼なじみの姿などいつまでも見ていたくはなかった。元の位置に戻した戸棚に寄りかかる。

（これで、いい……）

カサイの熱い唇からもれる小さな嗚咽は、乱暴に開け放たれた扉から入ってきた軍人^{ケンゲ}によって、すぐに苦痛の呻きに変えられることになった。

エピローグ

「お前の罪は、鬼を助けていた組織の一人を逃がし、かばい立てしていること、だ。今のところはな」

踏み込んできた軍人^{ケンブ}が見つけたのは、カサネ一人だった。しかし、床に残った血の痕や地下室にあった二人分の食事の残り、何よりカサネ自身が一切弁明をしなかったため、カサネは連行され拷問を受けた上で牢に入れられている。

カラタチは、世話になった礼に、死の近い男の最期の頼みの一つくらい聞いてやろうと耳を傾けた。

「『鬼を逃がしてたのは俺だ』」

カサネの掠れた声は、妙にはつきりと耳に届く。

「晒し首になるぞ」

脅してではない。忠告だ。カラタチは狩人^{イユーガー}だが、売人^{シュラウ}としてのカサネという男の事は決して嫌いではなかったから、できるならば楽に死なせてやりたかった。

「全部、俺だ。鬼を逃がしてたのは……俺だ」

カラタチの忠言は、覚悟を決めたカサネの前では無駄に終わる。

「阿呆が」

そうだな、とカサネは笑った。

（ミスギ。お前が、敢えて苦難の道を往くのなら、せめて、俺を選ばなかったことを幸福だと思えるように）

鬼への憎しみも、人とのしがらみも、すべて引き受けよう。
愛していたから。

欠けたものは、補う何かを求める。

心は、響き合うもう一つの心を求める。

片恋は、応えてくれる想いを呼ぶ。

二つに分かたれたものは、片割れを求める。

人は鬼を求め、鬼は人を求める。

これも、すべてはゲヒシテの思惑なのか。

しかし、一方向で成り立つ愛はいつも、完成を見ずして終わるのだ。

イェーガー
狩人の男はやがて戦火を離れ、彷徨い歩いた果てに人と鬼の共存する村にたどり着く。

それは遠い未来の、また別の話である。

エピローグ（後書き）

これはサイドストーリー、ですらないな、いわば世界観だけ借りた二次創作なのです。

同じ世界で、まだ見ぬ本編がどこにあるのです。

そしてその本編は私が書くわけではないのです。

この話は鬼と人がどうこうの難しげな話ではなく、一人の不器用で不幸な男の話なんだと思います。少なくとも私はそういうつもりで書きました。

もっとバトルバトル！でエンタメな話にしても良かったな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554v/>

Ich w?hle es

2011年8月17日03時25分発行